Qiita Conference 2026 Autumn

知識を価値に変える技術

— AI時代に必要な伝える力

山田祥寛

WINGSプロジェクト代表

WINGS
More Progress, More Future

自己紹介

◆ 2002年から、技術書の執筆コミュニティ「WINGSプロジェクト」を運営

◆ 書籍241冊、記事3541本を執筆・監修（2026年9月時点）

- 独習シリーズ（翔泳社）
- JavaScript本格入門（技術評論社）
- これからはじめるReact実践入門（SBクリエイティブ）
  など

◆ 600ページ超の書籍が多く、「凶器本」と呼ばれることも？

ライターとは？

◆ ライターは、結構寂しい職業

- 一人で原稿と向き合う日々（自分だけかもしれません）

◆ 一人だと比較できる他の書き手がいない

- 他の書き手ならば、どう書くか
- この感覚ってズレてない？（今日の講演も怖い）

◆ 1冊の本に数か月

- 1つのテーマに没頭するうちに、新しい技術から取り残される
- 気づいたら「浦島さん」

そんな閉塞感を解消するために

◆ 執筆コミュニティ「WINGSプロジェクト」を立ち上げ（2002年～）

- 専業エンジニア、講師、医師、資材調達のサラリーマン、主婦・主夫などなど
- 代表（私）は全体を見渡し、各メンバーが専門領域を深掘りする体制

◆ 執筆に没頭している時に、構成案の相談がやってくる

- Claudeの執筆に頭を悩ませてるのに、急に正規表現やExcelの話
- 出自がバラバラなので、考え方も語彙もバラバラ

◆ カオス。だが、それがいい！

- 強制的に別のタスクに振り向けられる
- しかも、自分と全然違う視点からツッコミが飛んでくる

今回のセッションでは

◆ AIの登場で、私自身の執筆もWINGSの活動も変わってきた

- ただ、まだまだ試行錯誤の途中
- 今日はQ&A形式で、実際に起きたことを紹介します

◆ 私が語れるのは、あくまで「執筆」の世界

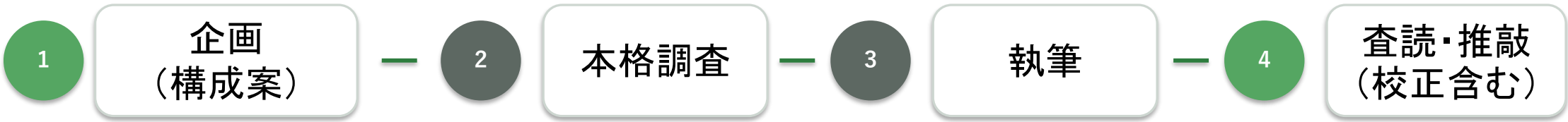
- でも、開発の仕事（コードレビュー、設計ドキュメントなど）と交わるところも
  - 「それ、うちでもあるな」
  - 「自分の仕事だったら、どうだろう？」

そんなところが一つでもあれば、持ち帰っていただければ

Q. 執筆にAIを利用していますか？

執筆の大まかな流れ

使っています！
　ただし、場面によって温度差があります



①構成案の作成（テーマ出し）

◆ボチボチ使っています

- ➢ ただ、それぞれのテーマを出させるのみ

◆「初心者向けTypeScript本で、関数を説明するときのポイントを挙げて」

- ➢ AIは大量に候補を出してくれる
  - 関数宣言／関数式／アロー関数／引数／戻り値／
    オプショナル引数／デフォルト引数／ジェネリック／
    オーバーロード／voidなどなど……

①構成案の作成（取捨選択）

「この章で、どこまで説明する？」となると話が変わる

◆ 人間の選択が欠かせない

- void と undefined の違いまで説明するのか
- ジェネリクスを最初から説明するのか
- アロー関数を主に説明するのか、クラシカルなfunction式？
- コードを先に見せるのか

◆ 初心者に何を優先して伝えるべきかという判断基準は

- 結局、人間が持つしかない
- 「なんでも入れ込みたい」の欲望に抗う時間

オマケ：AIに一から作らせてみたら

◆ 実は、この講演も最初はAIに構成を作らせた

◆ 結果は…えらく苦労した

- なんとなく筋道は通っている
- 評価させると、「いいね！」と褒めてくれる

◆ 進めていくと、ちょっと違う（言いたいことはそれじゃない！）

- いつの間にかAIのアイデアに合わせるために疲弊していた

◆ 結局、一から自分で作り直した

最初の枠組みは人間が作るべき

②本格調査

◆ 使う：バリバリ使う

- 「調べることは10、書くことは1」
- 体感としては、かなり効率化された

◆ ただし、心配なのはハルシネーション

◆ そのため、幾つかのルールを設定している

- 出典を明記させる
  - 「公式ドキュメントによると～」は要注意
  - 問い詰めると「ゴメン、なかった」はよくあること
  - 出典を起点として関連する箇所を一通り査読（なければ、その情報はカット）

②本格調査

ハルシネーション対策（続き）

◆ 異なるAIに同じ質問を投げる

- 同じ幻覚を偶然出力する可能性はそれなりに低い
- 同じことでも言い回しが変化（あ、そうか！）

◆ あらかじめ結果を予想する（これ重要！）

- 予想と結果が一致している場合はそれなりには信用
- 絶対ではない（あくまで重点管理の一環）

書かれたものを疑うのは疲れる。
でも最初の予想との違いは自然な違和感

③執筆

◆ 使う：でも、あくまで露払い

◆ 文案をひととおり書かせてみる

◆ 感覚としては、関連書を何冊も読むのに近い

- 「これいいな！」「この辺はこんな風にしたい」「あ、こんなテーマもあった」

◆ 限りなく、自分の本と同じ構成で比較できるので、良し悪しが洗い出しやすい

◆ 最終的な原稿は、自分で一から書いていく

途中で行先を迷わないための羅針盤のような感じ

③執筆

人によって分かれるスタイル

◆ 人によっては「原稿を自分で直さない」という人も

- 直すべき箇所はAIにすべて指示する
- 人が直してしまっては、AIが学ばないから

◆ 正しい、たぶん正しい

③執筆

それでも手作業を外せない理由

◆ でも自分は一から手作業で書いていくステップを外せなかった

◆ ふと気づくと、認知負債が紛れ込んでる

- ➢ え、なんでこの表現使ったの？
- ➢ この説明の意図は？
- ➢ 読んだ時にはなんとなく理解した気になっていたのに

◆ 読むスピードと書くスピードは違う

- ➢ 書くスピードの中で生まれるアイデア、気づきがある

④査読・推敲

◆ 使う：積極的に！

◆ 誤字、用字統一には積極的に利用できる

- ➢ ただし、修正箇所はdiffで確認（安定性を見ながら削減できる工数？）
- ➢ 辞書のメンテナンスは課題
  - 作業環境がさまざま（テキスト、Word、PDF、CMS、画像まで；）
  - 関わる人もさまざま

④査読・推敲

◆ 内容の精査は、使い方次第

◆ 私が最近やっていること

- 全体を渡した上で、戻しは小さな単位でもらう
- 自分で読んで、自分の考え（査読コメント）を入れてからAIに渡す
- 聞き方を変える
  - ×「全体的に気になる点を挙げて」
  - ○「自分はこう感じるんだけど、あなたはどう？」

人間が後手に回ると、却って遠回り。AI指摘の理解に疲弊する

④査読・推敲

壁打ちできる相手がいる嬉しさ

◆ 自分自身は...

- ここ理解できる？意味は通じるけどくどくない？
- 1文字、1文の表現（てにをは、文尾、接続詞）で悩むことすら
  - 例：「この段落（説明）同士のつながりがシックリこない」
- 今までは1ヵ所で何十分も手が止まることが

◆ 脳内で霧散していた思考が、壁打ちで形になるのが嬉しい

- 議論して満足してしまう反面も

そこまで自分で悩み切って絞り込んだ問いだからこそ、
意見をもらう意味がある

Q.これは自分だけの話？
AI時代に周囲は変わりましたか？

これまで苦戦していた著者さんが

◆ 企画時点では面白いテーマを語ってくれる

◆ でも、原稿に十分に反映できない

- 「判ってるでしょ？」が前提で、言葉が足りない
- 言いたいことが多すぎて、話がまとまらない
- ひとつの項に3〜4個の話題がミッチリ

◆ 何度も議論するが、あまり議論が煮詰まっていかない…

AI時代のこの数年

◆ 主張が明瞭となり、中身も面白くなった！

- ➢ 言葉足らずなところを、AIとのやり取りが補ってくれた

◆ 執筆スピードが上がり、企画の提案数も増えた

ただ良いことばかりではない

これまで活躍してきた著者さん

◆ 丁寧に検証を積み重ねる

◆ 個々のテーマを、ターゲットに向けて噛み砕ける「言語力」

◆ 監修からのコメントをもとに、推敲を重ねる「粘り強さ」

AIの力を借りれば、更に面白い記事を書いてくれるはず！

と思っていたら

元気がなくなってしまった

◆ 著者陣から聞こえて来た声は…

ちっとも楽しくない

調べて、コーディングして、
記事を書くのが楽しかった…

人間が書く意味がない；

何が明暗を分けたのか

元気をなくした著者さん

強み

事実を調べ、積み上げ、整理する力

↓

AIが一番得意な部分と
そのままかぶっていた

↓

作業は「**肩代わり**」されて楽になった……
が、それが逆に
やりがいの喪失に

伸びた著者さん

強み

事実に対する自説・技術を、
メタレベルで昇華する力

↓

AIが代わってくれない部分

↓

面倒な言語化をAIが引き受けた分、
その人にしかできない部分に
時間を割けるように

執筆メンバーの声を聞いてみた

◆ 執筆・推敲でのAI活用について、メンバー何人かにアンケートを実施

◆ 回答から見えてきたことを、いくつか紹介します

＜ご協力いただいた著者さん（五十音順）

小林昌弘さん、齊藤新三さん、髙江 賢さん、Nkznさん、山内直さん、山田研二さん、ほか多数＞

メンバーの声①

◆ 自分の過去の記事から、文体や考え方などの癖を抽出させ、それを基にした下書きを書かせる

自分でもやってみた

実際に抽出された自分の癖

◆「なぜそうなっているか（設計思想・背景）」を先に説明してから構文・使い方を示す

- 単なる仕様の列挙で終わらせない

◆「ざっくり言ってしまうならば／ざっくり言うと」

- 厳密さより直観的理解を優先する簡略説明の前置き

◆ 具体例ファースト

- 抽象的な定義の前後に必ず「たとえば～」で具体例を添える
- 定義だけで終わらせない

下書き以上に、自分の「なんとなく」を一覧してくれるのが面白い

メンバーの声②

AIにどこまで任せる？

AIへの委任	実際の活用
かなり任せる	採番のやり直し、サンプルコードの見た目調整
確認しながら任せる	Mermaidによる概念図の下書き（清書は自分で）、ファクトチェック
まだ試行中	本文執筆、過去作から文体・観点を抽出して「自分らしく」書かせる
人間が判断したい	目次・構成

記事を書こうと思ったモチベまでAIに預けてしまうと、
自分の存在意義がなくなってしまうので、
どこまでなら任せても＜魂＞が残るのかを試行錯誤中

メンバーの声③

AIで「調べ方」が変わった

◆ これまで

- 検索→公式ドキュメントを読む→自分で整理・要約

◆ AIを利用するようになって

- AIに原典を読ませる→要約・全体像をつかむ→原典を読む＆自分で判断

行動の逆転
「検索の代替」ではなく、「原典を読む前の助走」にAIを使う

メンバーの声③

文章や図には、あまり使わない

◆ 文章、図は自分で書いた方が早い

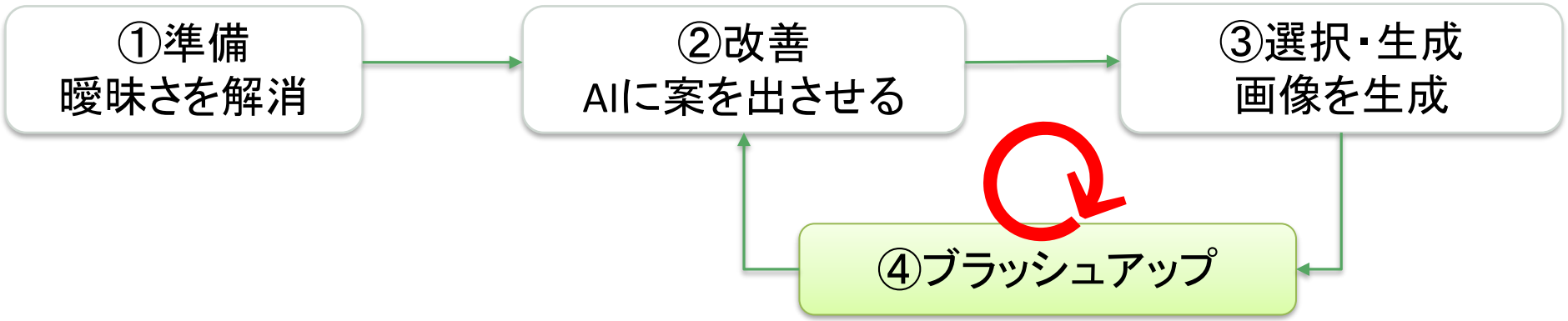
- 自分の頭の中に既に構成がある
- 「AIにプロンプトを書く→出力を確認、ミスを修正する」のは却って大変

◆「図を考える」ではなく、「頭の中にある図をアウトプットするだけ」

AIを使うことが重要なのではない。
「どこまでAIに任せるか」を判断することが重要

メンバーの声④：概念図も、AIと一緒につくる

「一発で完成」ではなく、対話しながらブラッシュアップ



「プロンプトを上手に書く」ではなく、
「AIとの対話を使って自分の意図を具体化していく」

メンバーの声⑤

「自分の脳内にあるLLMの出力プロンプト」を探す

◆ AIに答えを聞くのではなく自分の中にある「なんとなく」を言葉にする

① なんとなく

「AIって、何か違う…」

AIと壁打ち

② これだ！

「AIとは俳句である」

↓

- 情報を削る
- 暗黙を伝える
- 多くを想起させる

別の問題にも使ってみる

「説明」ではなく、その考えの“空気”を表す言葉を探す

メンバーの声⑥

使う	使わない
構成案	推敲
下書き	校正
サンプル	

◆ AIを使わない理由は？

「特にないです。(^_^;)」

メンバーの声⑥

躊躇の正体:「心理的な距離感」

- ◆ AIの学習に使われるのはイヤ
- ◆ 大量のテキストを入力するのも気になる
- ◆ 課金も……？
- ◆ そもそも、自分でも理由をはっきり説明できない

AIを使う・使わないは、「機能」だけでは決まらない

Q.情報はどのようにインプットしていますか？
その方法はどのように変化しましたか？

私自身は…

特別なことはしていません

◆ 書籍・記事の執筆が、そのままインプットの機会

- 説明する前提でインプットする
- だから必死。最初からアクティブ

◆「これってどういうこと？」

- 最初から質問が出る（出さざるを得ない）

振り返ってみると…

「インプットのためのインプット」ではなく、そうせざるを得ない形を作ってきた

WINGSを立ち上げる	→ 強制的に、別の視点へ振り向けられる
説明する前提で勉強する	→ 質問を出さざるを得ない

AIを使うときも、たぶん同じことをしていた

構成は自分で作る	→ 何を捨てるか、決めざるを得ない
先に結果を予想する	→ 違和感に、自然と気づく
手で一から書く	→ 認知負債に気づかざるを得ない

AIは「せざるを得ない形」を…

作ってくれることもある

- AIに質問させて、曖昧さを言葉にする

（メンバーの声④）

- 壁打ちで「いや、そうじゃない」と言葉を探す

（メンバーの声⑤）

肩代わりして
しまうこともある

自分の仕事だったら、どうだろう？

何をAIに任せて、何を自分でやっているんだろう？

※この辺は来年には全く違うことを言ってるかもしれません

ご清聴ありがとうございました

ちなみに、WINGSプロジェクトは今日も執筆者を募集中です（＾＾）

https://wings.web-deli.com/project#recruit